

教育委員会

コラム Vol.12

教育長室の窓から

一艇ありて一人なし



過日、教育雑誌から執筆を依頼されました。依頼内容は「最近、小・中学校の先生から、先生同士、子どもとのコミュニケーションがうまくいかない」という内容でした。

私の好きな言葉に「一艇ありて一人なし」というのがあります。これはローイング（ボート）競技を象徴する言葉です。どんなに苦しくても動作を一つにすること、心を一つに一丸となること、チームとして行動する言葉です。

「コミュニケーションがうまくいかない」一番の原因は同僚性にあるかと思います。これは、学校現場のみならず社会全体に見られることかと思います。仕事などする中で、お互いに助け合って高め合っていく協働的な関係性であると言われていています。学校には若手やベテラン、中堅といった教職員がいますが、抱えている悩みや不安は異なります。私が教員になりたての時代（昭和）の職員室には、何気ない出来事やクラスの様子を語り合う姿があり、対話（会話・雑談）を通して、知らず知らずのうちに互いの信頼関係が構築されていました。これは子どもとの関係性についても同様でないかと思います。また、日本の学校の強みとされていた研究授業など教師の研鑽の時間も十分に確保され、授業を見合ってそれぞれの知識や経験を行き来させながら、情報交換をして互いの授業力を高め合う姿も学校のいたるところで見られました。

コミュニケーションの基盤は、互いを尊重し支え合うことです。まさに「一艇ありて一人なし」かと思っています。



学び続ける素晴らしさ (届いたうれしい便り)

「もう一度勉強がしたい。勉強して感謝の手紙が書けるようになりたい」そんな想いを持つ中国人の方を聴講生として、以前勤務した教育委員会で受け入れました。

当時、47歳の女性でした。彼女は、日本の夜間高校を卒業していましたが、主語・述語などをもう一度しっかり勉強して、お世話になった方々に感謝の手紙を書きたいと私を訪れてきました。以前から知っていた方でしたし、「勉強したい、学びたいという」熱意とともに、ちょうど私も「学び直し」のあり方を模索していた時期でもあり、町内の学校で受け入れることにしました。35歳、36歳も違う子どもたちと一緒に学ぶ姿に、学ぶことの素晴らしさ、学びは一生涯続くことを、私たち大人も一緒に学習する子どもたちも感じました。

便りの最後に「学び直しに誘ってくださったご恩は、永遠に忘れません。これからも感謝しながら、学び舎ゆめの森で、学び続けていきたいと思っています。」とありました。

今、彼女は、自分史の執筆に向けて、頑張っています。

本町でも生涯学習の事業として、長寿大学（令和7年度からはシニアカレッジ）や生涯学習講座を公民館ごとに開催しています。どの事業も公民館ごとに特色があり、年齢に関係なく和気あいあいとした雰囲気の中で、皆さんが学んでいます。学びは、豊かな人生の一助になります。ぜひ気軽に参加いただければ幸いです。

